

春夏秋冬 台湾徒然

第41回

人形の神様

柳本通彦

数年前に台湾の新聞局が「台湾を代表する事物」を公募したところ、その第一位に選ばれたのは、布袋戯ポテヒという非常に地味な芸能であった。

布袋戯とは、福建に発祥した人形芝居で、二百余年前に台湾に伝わり、この島に定着した。高さ30センチほどの人形の下から手を入れて操る。飛んだり跳ねたりの活劇風で、衣装が袋のように見えることからこの名がある。

布袋戯の普及は、福建省の沿岸と台湾という狭い地域に限られ、しかも本土では文革などを経て衰微したので、いまは台湾のみに現存する希少な舞台芸術といえる。

台湾に長くいる我々もその存在を再認識したのは、人形師を主人公とした『戯夢人生』(1993年侯孝賢監督)という映画が契機である。かつては村祭

りには欠かせない出し物だったが、テレビにおされて、活躍の舞台を失いつつあった。しかし近年は、台湾ならではの文化として、その存在がクローズアップされ、各地で教室が開催されたりしている。

とはいえ、その独特の技術は、親方の男児にのみ伝承されてきた門外不出の秘伝なのである。それをプロとして身につけるのは並大抵のことではない。その難関を乗り越えた日本人、しかも女性がいるときいて、沖縄本島北部・羽地内海に浮かぶ屋我地やがぢという島まで足をのぼした。

その人は、桑江純子さん、1951年名護市出身。大学の保育科を卒業したあと、人形劇団「かじまやあ」を結成したが、やがて劇団存亡の危機に……。そのときに出会ったのが、台湾



新しい沖縄人形劇を興した桑江純子さん

の「布袋戯」である。

とにかく現地での舞台を見たいと、33歳で台湾に渡り、師匠「鍾任壁」氏に出会う。その技量と人柄に惚れて、その場で弟子入りを志願するが、外国人、しかも女性への指導に師匠一家は強い難色を示した。桑江さんは、それ

にもひるまず頼み込み、10日後に弟子入りを果たすが、修行は尋常ではなかった。家族同様に生活しながら、1日10時間は人形を手にし続けたという。約1年、晴れて免許皆伝。彼女は沖縄に帰り、「かじまやあ」を屋我地に再スタートさせた。

当初は、西遊記などを演じていたが、

近年は、沖縄の故事に由来する題材に取り組んでいる。96年には「キジムナー(樹木の精霊)」で全国巡回公演を千回近く成功させ、一気に沖縄人形劇を全国ブランドに押し上げた。

現在「チョンダラー(旅芸人)」という芝居で、国内各地の学校などをまわっている桑江さん。彼女は、台湾や師匠との出会いをとりもつてくれたのもすべて「人形の神様」のおかげという。2006年に立ち上げた「かじまやあ美術館」のステージには、師匠の写真とともに「人形の神様」が祭られている。その前で、披露される「チョンダラー」は、大きな白龍が登場する大活劇で、人形が手から離れてとびかう様や琉球言葉のかけあいに歓声と爆笑がおこる。これらがたった二人の人間すなわち四つの手で演じられていることを知ると、観衆は唖然とする。

台湾伝統の布袋戯から沖縄人形劇への大変身。それは、まさに「人形の神様」の神業としか見えないのである。

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。99年度「潮賢」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く」台湾原住民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)